



1983-1

No. 172

【表紙】

妙喜庵茶室

解説は25ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

日本文化と西洋文化

林 健太郎 4

随想 行くも夢、来るも夢

吾妻 徳穂 13

今年度の芸術祭を顧みて

——演劇部門——

和田 秀夫 15

今年度の芸術祭を顧みて

——能楽部門——

山崎有一郎 17

現代フランス文化と文化政策①

フランス文化政策の新しい方向

植木 浩 19

文化庁ニュース

昭和57年度(第37回)芸術祭芸術祭大賞・
同優秀賞決まる

23

第29回文化財防火デー

25

重要無形民俗文化財の指定等

26

展覧会

京の人形

30

新しい紙の美術—アメリカ展

30

伝統芸能への招待⑨ 28

邦楽

国立劇場ニュース 31

近松名作集

日本文化と西洋文化



林 健太郎
(国際交流基金理事長)

「日本文化と西洋文化」ということですが、これを論ずるのは大変難しいことであります。そこで、今日は、こういうことを考えるにあたっての最も常識的な、そして学問的にも十分承認され得る、そういった意味での基礎的なことについてお話しをしたいと思います。

以下三つのことについてお話し致します。まず最初は日本文化と西洋文化の共通性、次に両者の相違、最後に本日は地方文化、地域文化についての研究協議の会ですから、それに関係したこと、この三つであります。

日本文化と西洋文化の共通性

(一)

まず西洋文化という場合の西洋というのはヨ

春秋時代に奴隸制が封建制に変わったと主張してこれが例の「枕林枕孔」のもとになっている。要するに封建制のないところに無理に認めようとするものだから、非常な混乱が起るわけです。

学問的な意味で封建制度は、知行制度と主従制度の二つの柱から成り立っているとされます。近代以前の社会はどこでも身分制の社会ですから、上下の区別ははっきりしているのですがそれがそのまま封建制ではありません。主人と郎党、領主と家人という個人的な関係が重要な要素となり、この主従関係に土地が結びついて、いわゆる知行制によるつながり、つまり家来は主人に対して忠誠を誓い、その代償として主人は家来に土地を与える。与えられた土地は家来が自分で裁量し、主人はその内部には口を出さない。しかしいざという時には、家来は主人の為に力をつくすという関係が成立し、これが封建制度の根本となりました。こうした制度が発達したのは日本とヨーロッパであります。

(二)

歴史上、日本でこういう封建制が生まれたのはいつかといいますと、源義家が後三年の役で清原家衡らと戦争をしたのですが、朝廷がこれは私闘であるとして恩賞を与えなかったため、

ヨーロッパ、その延長としてのアメリカであります。そして、日本と西洋との間に「東洋」があり、広い意味で言いますと、日本文化というのは東洋文化の一部であるということが出来ます。ところが、これは世界史上の顕著な現象であり、ある意味では不思議なことといっているかもしれませんけれど、日本の歴史の発展、あるいはその社会制度の歴史的発展ということから申しますと、日本の歴史とヨーロッパの歴史の間には多くの共通点があり、その間のアジアのそれは非常な相違があります。今日、世界では西洋と日本がいわゆる「先進工業国」であつて、それ以外の地域は「発展途上国」あるいは「第三世界」といわれる国々ということになっています。日本が先進工業国であることはもちろん明治以降の西洋文明をとり入れた近代化の

義家が自分の土地を家来に分け与えた。これが封建制の始まりだとされています。ヨーロッパでも似ていて、カール大帝が出る前のフランク王国のはじめの王朝であるメロヴィング王朝の下で、いわば家老のような家柄であったカロリング家がだんだん有力になり、メロヴィング家に代わって王朝をつくりますが、そのきつかけになったのは、カール・マルテルがサラセンがスペインからフランスに攻め込んで来た時に、トゥール・ボワテエ間の戦いでこれを打ち破り、自分の持っていた土地を家来に与えて主従関係を作ったということであり、これが西洋の封建制度の始まりだといういい方があります。もちろん社会制度ですから一回の事件でそういうものが突如生まれたわけではありません。実際には封建制度は時代の過程の間にだんだんできたものですが、こういうことが社会制度成立の顕著な契機として挙げられることはありうることで、しかもそれが西洋と日本で共通しているのです。これに対して、隣の中国などでは、こういう封建制度は生まれておりません。ではそれと異なる社会制度は何かと申しますと、それは東洋的専制主義と呼ぶべきものであります。これは中央に強大な権力を持つ君主がいて、それが知事のようなものを全国に派遣して国を治めるといふ集権的な大帝国であります。一方、封建社

成功の結果であります。しかし、歴史を見てみますと、日本とヨーロッパにはかなり古い時代から共通性があり、中国とかインドとか、更にその他のアジア諸国とは顕著な相違があります。どの点が一番はっきりした相違点を一口で申しますと、歴史の発展の上で、封建制度の段階を経過しているかないかということであります。

日本では、かつてマルクス主義の唯物史観の影響が強く、原始共産制が一番初めにあって、それから奴隸制、封建制、資本主義へと進んでいくといったような公式が、かなり流布しました。最近マルクス主義の影響も退潮しましたけれど、そういう考え方はまだ残っているものですから、封建制は世界中どこにでもある制度、あるいは人類が経過する必然的な段階と考える人がありますが、学問的な意味では、そういうことではなく、例えば、中国には封建制度はないのです。日本のマルクス主義者は戦前から中国の歴史についていつまで奴隸制でいつまで封建制かということをずっと議論して来ました。戦後中国が共産国になると、ここでももちろんマルクス主義が国定学説ですから同じような議論をしています。ところが、この両者の内容は大へんちがうのです。日本では、中国の奴隸制を隋唐時代まで認めていたのに、中国では

会というのは地方分権であることが特色です。それぞれの地方地方に有力な領主があり、それが自分の領国を支配している。しかしその領国の中でも領主が全部直接統治するわけではなく、自分の家来にそれぞれ土地を与えてその土地内のことはその家来にまかせていくわけです。ただし、戦争のある時は臣下は領主と一緒に戦って戦う、それが封建制度であります。

東洋的専制政治というのは中国やインドだけでなく、古代のエジプトとかメソポタミア、ペルシアなどに成立し、それが偉大な文明を生みましたが、その後同じような国家体制がずっと続いたために社会が停滞してしまい、自ら近代というものを生みだすことができず、そのためにそれらの国は結局ヨーロッパの植民地ないしは半植民地のようになってしまうました。

日本においてはこういう専制的帝国は成立しませんでした。飛鳥、奈良から、平安朝に至る日本国家は、中国の隋、唐を模した国家でしたが、聖徳太子以来、中国の制度を採り入れながら自主的な採り入れ方をしております。奈良とか京都とかに中央集権的な都において東洋的専制主義のような形をとりましたが、それにもかかわらずそれぞれの地方には豪族の勢力が存在して中国のような国家にはならなかった。それらの地方勢力がやがて武士勢力として抬頭し、

それによってやがて封建制が生まれます。封建制というのは地方分権の時代です。強力な中央から権力によって全国が支配されるということはありません。従って封建制度における支配関係は東洋的専制政治における支配者と被支配者のようなメカニク的なものでなく、量的にいつでもそんなに強大ではありません。そこに人間的なつながりがあります。しかも封建制度は地方分権ですからお互いの間に競争があり、これが室町時代になると、各地に大名が割拠して戦国時代になります、そしてそれがやがて織田信長の統一になります。

(三)

こういう地方分権とお互いの競争という社会では、領主の領地の間隙を縫って商工業者の集団として都市が勃興して来ます。この点が日本とヨーロッパの歴史が非常に共通しているところであり、和辻哲郎氏の「鎖国」という本があります。その中で室町時代から織田・豊臣の時代、つまり文化的に言えば安土・桃山時代の日本とヨーロッパの共通性がよく調べて書かれています。中国のように国の名前が変わっても同じような体制の国が続いたところは日本、ヨーロッパは違うわけです。

文化面で申しますと確かに奈良時代には奈良

共通点があるのですが、一方では、この徳川時代はあくまで封建制の再編成の時代です。

(四)

徳川時代において中央の権力は非常に強大で、各地の大名に目を光らせています。しかし統治機構そのものは、それぞれの大名に任せて直接幕府が支配をしません。それぞれの領国は一種の独立国という形で営まれています。この点はちょっとヨーロッパの絶対主義国家と違うところ。そこで、かつては徳川時代の封建制の再編成の面だけを非常に強調する見方が強かったわけです。もちろん、幕藩体制というのはそういう性質を有するものであったのですが、それにもかかわらず江戸幕府は全日本の支配者であり、その下で、一つの日本の国民文化というものが生まれています。

国家制度は地方分権になっておりましたが、徳川幕府が生み出した参勤交代制、これは世界に独特な制度ですが、これによって大名は江戸と領国を往復します。また、江戸には大名の屋敷がありますから、それぞれの藩国のエリートのような人間は殿様に従って江戸にやってきて、江戸に滞在することが多いわけです。封建的割拠性といいながら、それぞれの領国のエリートたちは江戸においてつき合いますから、

時代の、平安時代には平安時代の文化があります。これらは前の時代のものを受け継いではありますが、しかし前の時代にはなかった新しいものができています。そして鎌倉時代になりますと、武士というものが中心になり、それまでと異なる文化が出てきます。特に日本の場合、宗教の上で鎌倉仏教という新しい宗教ができて平安仏教と対抗します。そして安土・桃山時代には絢爛たる文化が開けます。

ヨーロッパでは古代ローマを最後とする古代文明が没落し、その後には封建制度の時代が来て、その封建制度の終わり頃には、たとえばイギリスでいえばバラ戦争といった封建領主間の内乱が続く、他方、百姓一揆、都市の勃興が起こってきます。これはヨーロッパ大陸でも同様です。そこに「ルネッサンス」といわれる大変革やかな文化が咲くわけです。このルネッサンス時代と日本の安土・桃山時代は、一世紀ぐらい日本が遅れますが、しかしほぼ重なった時代に、同じく絢爛たる文化が開化します。社会的にも共通点があるのは、新興の商工業者、都市の市民がその文化の担い手であることで、日本でも安土・桃山の文化を作ったのが、町衆と呼ばれる都市の商工業者たちであったことです。しかも群雄割拠の争いの中から新しく統治者となった者が文化を大いに保護し、助長したために、日

そういう中で、もちろん剣術の道場に通って修業することもあります。また、いろいろな学問的・文化的な面でも互いに知り合いになるということが起こるわけです。もちろん、その背後には経済的に日本が一つの経済圏というものをつくり、街道が整備され、海上交通も発達することにより、日本全体が一つの国内市場を形成したことがあります。しかも戦争がなくて平和が続きますから、武士階級は、それぞれの領国の国家経営の官僚みたくのものになっていき、国土の開発や殖産興業といったものに携わることになります。つまり封建的な身分関係の上に立ってはいませんが、近代的な官僚の前身が形成されるわけです。こういう人材の養成のためにそれぞれの大名は、藩校を設けて学問を奨励しました。そういう意味で、徳川時代には全国の方々の地域に優れた学者が存在しました。しかもそれらの人々は決して孤立していたのではなくて、お互いに交遊があり、影響し合っています。江戸時代にはこういう、近代国家と封建的割拠性のミックスした大変独特な社会がつけられたのです。明治維新は結局、この割拠性を打破することが必要であったし、それによって新しい国家が生まれますが、この近代国家を経営する際に、その人的資源、マン・パワーにおいて日本が全然不自由しなかったのは、それぞれ

本においてもヨーロッパにおいてもそういう新しい国家の中で文化がいつそう栄えることになったわけです。

以上のように日本とヨーロッパは歴史の段階づけが非常につきりしており、また、これはヨーロッパのある歴史家の言葉ですが、封建制を経験した民族だけが自分自身で近代化することができたのであります。

ルネッサンスの時代つまり十五、六世紀は全ヨーロッパ的には、封建制度の割拠性を克服した近代のナショナル・ステートができた時代ですが、そのナショナル・ステートの政治制度は、いわゆるアソルティズムといわれるものです。君主権がまた強大になって中央集権国家をつくるわけですが、それは、新興の商工業勢力と結んで更にそれを大いに助長します。イギリスでいえばエリザベス一世の時代、フランスでいえばルイ十三、四世の時代であり、今日の民族国家の基礎がこの時期に出来たといえましょう。

日本についてみると織田、豊臣から徳川と続く天下統一の過程は、ヨーロッパにおいて封建的な割拠性が絶対主義君主によって統一されるのとは対照しています。しかし、出来上がった徳川幕府は非常に独特なものとなりました。初めて国民文化というものがあるに成立したという意味では、西洋のアソルティズム国家と

の封建諸侯の領国において近代社会をつくるための人材が養成されていたからです。その意味で日本の近代化は、西洋文明の輸入という形はとりまじけれど、封建制を経過した民族だけが、自力で近代化することができたという命題は、私はやはり、あたっていると思うんです。そういうわけで日本文化と西洋文化という場合にまず社会の発展、歴史というところで大きな共通性があり、その共通性が近代社会を作ることに大きな意味を持ち、また日本や西洋以外の国との違いの大きな基礎にもなっていることがいえるわけです。

日本文化と西洋文化の相違

(一)

次に、今度は西洋文化と日本文化の違いについてであります。これについて日本ではしばらく前から日本人論、日本文化論が大へん盛んで、そこでは日本人や日本文化がいかに他とちがった特殊なものかということが強調されています。大変博識な議論が多く、私は感心するところもあればわからないところもあり、またことさらちがうところを強調していると思うこともあれば外国にも同じようなところがあるではないかと思うこともあります。しかしここではこの種の

議論にはあまり立ち入らないで、やはり基礎的な事実関係について述べようと思います。

文化とは人間の心のあり方、働き方から生まれるものですが、その基礎にはそれぞれの地域の支配的な宗教がその性格をきめる重要な要素になっています。そういう意味で、西洋文化はキリスト教文化であり、日本では文化は仏教文化であるということが出来ます。しかし日本ではこの宗教のあり方がヨーロッパと異なり、中国の生んだ偉大な宗教、儒教と道教・老荘思想の二つを同時に受け入れており、これらに日本人が古来持っている神道が一緒になっている。それを嫌う清明心とかいうような心的態度であり、むしろ感覚のようなどころにあらわれておりますので、思想の内容という点からみますと、あくまで儒教、仏教というアジア大陸に生まれましました大宗教を採り入れることにより日本は、文明の段階になったといっていると思います。このことで非常に象徴的な存在は聖徳太子です。太子は敬けんな仏教主義者であるとともに、国家制度としては中国の制度を入れ、人間関係については儒教の倫理、さらに老荘の思想もとり入れているわけです。日本の皇室の皇太子という立場の聖徳太子によってそういう事業が行われていることは非常に象徴的なことであると思

も儒教も共に外国からとり入れたもので、それが同時に入って来て、しかしそれを自主的に採用しているということによるのだと思います。

この点は、例えば韓国では、三国時代、高麗時代には仏教の信仰が盛んで立派な仏教文化が生まれておりますが、その後、李朝の朝鮮になりますと、儒教を国教にしたものですから、仏像を破壊したりしているところが随分あります。日本の場合には、儒と仏がお互いに補うものとして同時に信ぜられ、それが少しも不思議とは思われない。そしてそのことが、私は現世生活における宗教性について、日本独特の働きをしているというふうに思うのです。

大体儒教は非常に現世的思想であり、しかも合理的な性格を持っています。十八世紀のヨーロッパで啓蒙思想というのがやりましたが、その代表者のヴォルテールは中国の儒教を高く評価しています。啓蒙主義者はキリスト教、特にその当時の教会のキリスト教に対して敵対的だったわけですが、それに対比して儒教の現世的、合理的な性格に大変注目したわけです。そしてこれは理神論であるといっています。理神論とはデイズム、ディーズムというんですか、これは神を否定するわけではない。儒教にも天という思想がありますから、キリスト教の神とは違いますが、やはり超越者の存在が認められ

います。そして日本はアジアの大宗教をすべてとり入れているわけで、その意味でキリスト教とちがって大へん東洋的な文化であるといえます。

(二)

そこでキリスト教思想と東洋の宗教というものの違いということですが、キリスト教の特徴は、唯一絶対神の信仰、人格神でしかもそれが絶対的な超越神であるということであります。そういうゴッドの信仰というものは東洋の宗教にはないものです。ゴッドが、一回的な行為で世界を創造したという考え方、それが自然と作為とを鋭く対立させ、文化というものを自然を加工し支配する人為的なものという観念を成立させたのだということがいわれます。それに対して東洋では自然と人間との融合、統一、そして文化というものをつくるものよりも成るものという観念が有力に存在することはたしかです。

またアダムとイヴの神話に表われている人間の原罪、キリストのはりつけによるその贖罪という神学が魂の救済と人間の行動とを結びつけてそれを重視する生活態度が生まれ、それがいわゆるインディビデュアリズム、個人の自立を齎した。近代というものがヨーロッパで始めてつくり出されたのはそのためだということもよく

ています。理神論とは世界をつくったのは神だけれども、それ以後の人間の世の中のこととは神の関与や指図によって動いているのではなく、あくまでも人間自身の行為によってつくられていくという考え方です。これは奇蹟とか啓示とかを説くキリスト教とは対立するもので、この点でヴォルテールはキリスト教よりも儒教の方がすぐれているということを知っているわけです。たしかに儒教は、現世の人間関係を律するところの原理道徳を説いていわゆる快力乱神を悟らない。大へん人間中心的で、また合理的なところがあります。

(三)

日本の儒教を考えるうえで非常に特徴的なことは、徳川時代の儒教の独自性でしょう。幕府は林家の昌平黉を幕府の施設にして朱子学を官学にしたといわれていますが、ここでも朱子学だけが勉強されていたわけではありません。幕末に出た佐藤一斎は朱子学だけでなく陽明学をも究めています。また幕府の官学ばかりではなく、民間にもたくさん儒学者がおります。これほど方々ですぐれた学者が出て独自の研究を進めたことは本場の中国にもなかったと思います。

そして荻生徂徠の古学によく示されているように、中国の思想を祖述するのではなく、自分の

主張されます。

ところで日本の文化というと、それを代表する芸術を見れば、美術にしても文学にしても、いかに仏教思想の影響が大きいかわかります。現在でも日本が仏教国民であることはたしかです。しかしでは仏教だけかというところを決してそうではありません。久しく日本人の社会生活を規定しておりましたのは儒教の倫理でありました。儒教は仏教と並ぶ東洋の二大宗教と言われますけれども、儒教が宗教であるかどうかを問題にする人もあります。しかし、儒教にも宗教的要素があり、先祖崇拜から来る非常に煩瑣な喪の形式などがあります。しかし日本人はそういう宗教的な面は採り入れないで、専ら社会倫理として儒教を採り入れたのです。そして人間の死生の問題、魂の救済の問題としては仏教を信仰したわけです。

しかしこうしたことを日本人は特に意識していないし、矛盾とは考えないのであります。大体古い時代には学問というものはどこでも坊さんの仕事で、漢学者というものが独立の存在になるのは徳川時代になってからです。その前は坊さんが仏教と共に漢学、儒学を学んだ。室町時代の五山の僧などがその中心です。そして庶民教育に当たったのは寺子屋ですが、そこで教えているものは儒教の倫理道徳です。これは仏教

頭で中国の古典そのものにぶつかっていった、独自の思想を発展させています。徳川時代は鎖国の時代であり、しかも儒学は排他的であるかのように思われがちですが、実は徳川時代にも、長崎を通じ西洋の新しい学問が入ってきています。あの鎖国の時代にも、日本人は、普通言われるよりもずっと西洋の学問やインフォメーションに対し敏感に対応していたということが近頃のいろいろの研究の結果わかって来ております。

蘭学が生まれるのはもちろん、徳川の後期になります。その蘭学を修める人は必ず漢学を十分に修めた人であり、漢学を修めるといふことは蘭学を修めることの妨げになっておりません。なお幕末以降日本が西洋の文明や思想を取り入れるに当たって、漢学の言葉や概念がいかに大きな役割を果たしたか計り知れないものがあります。

私は中国の春秋戦国時代に出た諸子百家の学問は古代ギリシアと並ぶ世界の学問の二大源泉だと思っています。それを日本人は虚心坦懐に受け入れて、そしてそれを自主的に研究し続けて来た。そこに日本文化の特色があると思います。

日本人はこの中国思想と仏教とを共に受け入れたわけですが、仏教は西洋思想と古くから接

触を持っています。アレクサンダー大王がインドの方を征服した後に出来たギリシア人の国パクトリアのミリング大王の有名な問答にはギリシア思想と仏教の交流が見られます。キリスト教との間にも、これは中村元さんに聞いた話ですが、案外交渉があつて、カトリック教の儀式や服装など、共通点があり、キリスト教の方が仏教の影響を受けている点もかなりあるということです。西洋人はこういうことをあまり言いたがらないのですけれども、しかし、少なくとも密接な交渉があつたわけですね。もちろんキリスト教の絶対超越神の思想と、本来ヒンズー教から始まった自然と人間との融合みたいな考え方は、非常に違いますし、キリスト教の原罪といった考え方は仏教にはありません。ちがいはたしかにありますけれども、だからといってそれを断絶的にとらえるのもどうかと思います。たとえばルース・ベネディクトが『菊と刀』でいいたように、西洋文化は罪の文化で日本文化は恥の文化だと両者を峻別する見方なども問題です。これに対しては賛成する人と、和辻哲郎さん、津田左右吉さんのように、ベネディクトなんて日本のことをロクすっぽ知らないからそういうことを言うんだと非常に反対をした人もいます。戦後の一時期、日本は遅れた国で、日本の文化や歴史は西洋に比べて劣っているという考え方はまた十分他の文化につながるものがある。

そして西洋文化と対比される東洋的なものを現代に生きる形で表現している。そこに日本文化の特性があると思います。

キリスト教は元来ユダヤ教から受けついで大へん排他的な性質がありましたが、その非寛容性に対する反省はトインビーのような人からも大いに主張されました。そして最近のローマ法王の動きなどを見ても、世界の大宗教が互いに他を理解し合うというのが今の世界の大きな傾向だと思えます。

これには今の西洋文化の状況によるところも大きいと思われれます。西洋文化が生み出した個人の自立、インディヴィデュアリズムが近代の偉大な文明を生んだことはいまでもありません。そしてこのインディヴィデュアリズムが文化を生むものであることには少しも変りがありません。しかしながら、今日の西洋世界に現れているいわゆるマスソサエティ、つまり、大衆社会現象というものは、結局、人間がマスというもののの中に埋没してしまつて、かえつて西洋文明の強味であつたインディヴィデュアリズムそのものを失わせているのが実情です。端的に言えば最初イギリス病などと呼ばれ、その後欧米に拡がっている社会現象は人間が労働組合のような集団に埋没すると単なるエゴティズムの量

が非常に強かつた風潮と合致して、罪の文化というのとは高級な倫理があるが、恥の文化は人の顔色ばかり見ていて、こっちの方が低いのだというような考え方が広まつたことがあります。私はこれはあたらないと思います。恥というのはやはり倫理の根本をなすもので、ギリシャのアリストテレスの倫理学などにもそれは出ています。日本では家名を重んずるといふような觀念がありますが、これはヨーロッパの中世の封建社会でも同様です。これは、シェークスピアの芝居を見てもわかりますが、家名を重んじ、恥ずかしめられることを非常に嫌っています。恥というものを重んずるからといって、ただ人の顔色を窺つてばかりいるわけではありません。「俯仰天に恥じず」ということもあるのです。キリスト教の原罪のような考えが日本にないからといって、向こうの文化が深くてこちらの文化が浅いということにはならないと思います。アダムのイヴの原罪というような説話はありますが、仏教でも人間の罪業ということはいまです。ヒンズー教の場合には、この罪業が輪廻の思想になつて宿命論みたいになります。仏教の場合には、人間の通れられぬ深さを観ずることによつて、かえつて正しい行いによる救いを求めて行こうとする態度が生まれます。というわけで私は、キリスト教と仏教思想は、もち

ろく、個人の創意から生まれる技術革新などを受けつけないでしまふ。またかつての都市生活の基礎であつたコミュニティ精神が大都會では失われて治安の悪化、犯罪の横行が目立っています。こういう現象はまさに彼等のインディヴィデュアリズムを支えた倫理喪失に外なりません。そしてここに今日の西洋文明の危機があると私は思うわけです。

このことは決して西洋文化よりも東洋文化の方が優れているということではありません。西洋文化は現代の自由と科学の文明をつくつたあくまでも偉大な文化です。それが今日衰退的傾向を見せているのはそれがその根源の精神を失つてしまつてからに外なりません。そこでこの根源に帰ることが現代文明の危機を救ふ所以であるということが識者たちによつて唱えられています。それは西洋文化の場合、キリスト教の精神に帰れということになりますが、注目すべきことはそれが同時にキリスト教の独善性をも克服して他の偉大な宗教の価値を認めるといふ方向に向かつていることであります。

この点で最も注目すべきものはカール・ヤスパースの『歴史の起源と目標』であらうと思います。この本は紀元前五〇〇年頃を中心とした前後数百年の間に世界の各地で互に関係なく出現した偉大な思想家たち、中国では孔子、老

ろん相違はありますが、全然違ったものではなく、根本においてはつながっており、その表現の仕方が違つていてもその根源的な宗教性には共通のものがあると考えられるわけです。

儒教でも仏教でも、それを生んだ祖国ではなくなつてしまつて、それが残っている限りは社会の進歩、近代化にとつて阻害要因になることが多かつたことは事実です。しかし日本でそうならなかつたのは、最初にいつた社会の発展の特殊性もあると思いますが、また東洋の生んだ大思想を片寄らずにとり入れて、長短相補うような形で自主的に自分のものとして発展させて行つたことによるところが多いと思います。

(四)

近頃の文化論はとかく文化人類学的視角からなされるために、社会形態、人間関係、それと結びついた心的状態のようなものを論じて日本は特殊だ特殊だとさき立てることが多い。しかし肝心な文化の内容をおき忘れては何にもなりません。特殊性はどこにもあるので、ただそれだけをとり出して特殊性を主張してもあまり意味はないと思います。日本人が実際につくり出して来た文化の具体的な内容、芸術、学問、思想、社会制度、そういうものも考察することが大事で、それはたしかに日本独自ですが、そ

子等諸子百家、インドではジャナ、イランではゾロアスター、ギリシアでは哲学者や悲劇詩人たち、パレスチナでは予言者たち——その最後のものがキリスト——そういう人々たちによって人間存在とその限界についての深い思索が到達され、以後の人類はその基礎の上に思惟し行動しているのである。ヤスパースはこの時期を世界史の枢軸の時代と呼んで、現代の機械化と大衆化から生じている人間性喪失の危機の克服を、この枢軸時代の精神への回帰の中に求めているのであります。

国民的なものと地方文化

最後に、最初にあげた第三のこと、地方文化に関連したことをお話しします。私の専門のドイツ史などでは、第二次大戦後地方史の研究というものが非常に盛んになっております。そこで戦前は専門雑誌も二つか三つぐらいとつていればよかったのが、大戦後は、それぞれの地方地方に学会があつて雑誌を出すようになった。それらもとらなければならぬから大学などは大へんです。戦前からドイツでは地方地方、あるいは都市毎にアルヒーフ（文書館）があつて、それが歴史研究の大事な場所になっていきました。この地方史の研究が特に盛んになったのです。このように地方史が注目されてきたのは、

やはり歴史を一般論でなく、具体的に見ようとするれば、どうしてもそれぞれの地方地方の実態に即してみなければ、歴史の姿がわからない、ということからきていると思います。日本では一般にアルヒーフは整っていないですが、それでも地方の美術館・博物館が最近とみに充実しつつあるし、地方の国立大学を中心に地方史の研究もずつと深まって来ているのが現状です。この地方史の研究の重要性はその地方の独自のものを知ると同時にそれによって日本の国民的なことを知ることだと思っています。それぞれの地方のことを見ないと本当の国民的なものはない。この意味で私は地方文化への注目、或いはその振興は最近特に必要になってきていると思います。地方の文化活動は県とか市とか行政区域が単位になることが多く、これは当然のことですが、日本の場合は、やはりここでも徳川時代の封建制、つまり藩というものが大きな意味を持っていると思います。徳川時代の殿さまは、秀吉の時代からの移封や改易によって、ほとんど土着の人ではないにもかかわらず、長い間、その国の藩主をしていたことにより、その地方の歴史を総括したような形になり、藩主の居城が地方都市として文化の中心として発展することになった。このことは非常に重要だと思っています。と同時に、徳川時代のことです。

ましたように、それぞれの藩はそれぞれの特徴を持ちながら、同時に日本の国民的なものを表わしていたわけです。この性質は現在でも変らない。そういう意味で地方文化への認識を深めそれを振興することはとりもなおさず日本の文化を明らかにし、更にその国際性を高めることにもなると思うのであります。今私のやっているます国際交流基金の仕事、これは日本の文化を外国に紹介し理解させることを大きな目的にしておりますが、インターナショナルということとはナショナルなものを基礎にしてしかあり得ない。そしてこのナショナルなものは、日本の場合、それぞれの地域、地方というものを離れてはあり得ないのであります。

昨年、国際交流基金が行って大成功を収め、方々で評判になったものにロンドンの江戸展があります。しかしこの展覧会に出品した五百点以上の美術品は国立博物館に入っているものもありますけれども、いろいろな地方の公私の美術館、お寺、個人の所有物など全国に散らばっているもので、それを集めるには大へんな苦労がありました。それらを借り出すことができたのは文化庁のお力によるところが多く、大いに感謝しているところですが、ともかく国民文化というものが地域性、地方性と離れてはあり得ないことをあらためて痛感した次第であ

ります。それから、ついこの間、お隣りの中国と国交回復十周年ということで、かつては歌舞伎などおくったこともあるのですが、今度は趣向をかえまして、民俗舞踊をおくりました。津軽、岩手、広島等、地方の民俗芸能でしたが、大へん熱演をしてくれ非常に好評を博しました。これも地方文化を通じて、日本文化を国際的なものにするということだと思っています。

なお我々は外国からいろいろな芸術品や芸能団を日本に呼ぶという仕事もしておりますが、単に東京で開催するだけでなく、日本のできるだけ多くの地域でそれが行われるよう努力しております。これについては各地の文化会館や美術館に大へんお世話になっておりますが、今後

本稿は、昭和五十七年十一月九日に開催された文化振興会議において行われた講演を要約したものです。



編集後記

○明けましておめでとございます。今年はおだやかな天候に恵ぐまれ、新年を迎えたところが多かつたようです。○一月号をお届けします。今月号は、国際交流基金の林健太郎先生の「日本文化と西洋文化」で冒頭を飾ることができました。この論稿は、好評を博した昨年の文化振興会議での講演をもとにしたものです。御多用のところ、先生には手を入れていただき有難うございました。○昨年は、フランスのミッテラン大統領が来日しました。ミッテラン政権のもとでのフランスの文化政策などについて、フランスの事情に詳しい学術国際局の植木浩審議官に寄稿していただきました。これからも連続して執筆していただく予定です。○昭和五十八年度予算の政府原案がまとまりました。文化庁の予算案の概要については次号で説明する予定です。○本誌の編集などについて、読者の方からお便りをいただきます。それらも参考にさせていただきます。今後とも誌面の充実を図っていききたいと考えています。(W)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ギョウセイ 営業課
TEL)〇三(六八二二四一(代表)

「文化庁月報」一月号

(通巻第一七二号)

昭和五十八年一月二十五日印刷・発行

編集文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

発行所 株式会社 ギョウセイ

本社 〒100 東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒100 東京都新宿区西五軒町50番地

電話 (〇三) 二六八二二四一(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 物行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)